

第4回中学校区学園化構想第2ステージ検討委員会 議事録 概要版

日 時	平成28年10月20日（木） 15:00 ～ 17:30
場 所	掛川市教育委員会 会議室
内 容	
<p>1 開 会</p> <p>2 教育長あいさつ</p> <p>3 委員長あいさつ</p> <p>4 協議事項</p> <p>(1) 庄内学園視察の振り返り</p> <p>ア 庄内学園視察記録（事務局より）</p> <p>イ 意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・急激に少子化が進行する社会にあって、掛川市においても小中一貫教育を進める必要がある。 ・そのためには、掛川市独自の小中一貫教育基本方針を策定する必要がある。 ・基本方針は、9学園を基礎として考える。 ・各学園のごとに目指す子どもの姿を明確にして、学校、家庭、地域で共有することにする。 ・施設整備について、一体型を目指すにあたっては、施設整備に多額な費用を要すると共に、地域における子どもの利便性を考慮せざるをえない。実現するには、幾多の制約が生じ、9学園がそろって運営できることは難しい。 ・諸条件に適合した地域をモデルに選定し、試行的に進めるべきである。 ・放課後児童クラブ、放課後子供教室のことも考慮したい。 ・小中一貫教育を進めるための大きな問題は毎日の通学にある。学校からの距離、所要時間、地形等を考えれば、通学バスが必要になる。 ・小さい学校の良さはあるが、切磋琢磨して育っていく点では、不安なところが多い。 ・庄内学園を見学して、小中一貫校の良さを感じた。 ・地域の理解を得ることが大事であることを再認識した。 ・小学校を無くしたくないと聞けることがあるが、大きい地域になったことで、子どもが増える、地域が増えるという意識を持つようにしたい。 ・プール一つにしても、とてもお金がかかっていると思う。原野谷中学校は、校舎が古いので、中学校の敷地を使うとなると、かなりお金がかかると思う。 ・品川は運動場が狭い。大きい中学生もいるので、敷地については、50年後60年を見据えて考えるべきである。 ・光と影がある。 ・光 → 系統性のある教育、教育課程9年間の学びと育ちをつなぐ。 → 先輩後輩との自然な関わり、子どもの人間関係、中1ギャップの解消、小中教員の連携。 → 施設の有効利用。プール、特別教室、小学生が中学生のものを使う良さ。 ・影 → 通学に関わること。 → 小学校高学年のリーダーシップがどうなるのか。 → 管理職の負担の増加。 ・掛川市は、保幼小中の連携も考えていきたい。 ・50年間にわたってどういう形が良いのかを、地域で十分に練って話し合っていく。 ・検討委員会が、未来のことを見ていこうというスタンスで仲立ちをする。 ・一貫校を作ると、掛川市の場合は通学距離が長くなる。小学校1年生の通学に関して 	

はどうか。

→・庄内学園も、スクールバスを4台出している。

- ・掛川市で進めて行くには、幼稚園と同じように、スクールバスの必要性がある。

(2) かけがわ型小中一貫教育について4つの視点から協議

①公共施設のマネジメント

- ・教育施設の占める割合はどうか。

→・のべ床面積が45%である。経費では47%。今後これにかけられる予算は、今の4割くらいと見込んでいるため、50年もたないと考えている。

- ・今後は、人数も半分、財源も半分なら、一人当たりの面積は同じ。しかし、学校がバラバラに散在しているとコストはどうか。

- ・経年比較で、数が減っている所は、他の施設を使っているのだろう。今後の市の大きな視点や方向性を教えて欲しい。

- ・長期展望に立った公共施設のマネジメントの在り方とか、学校施設の在り方などの表現がよい。

- ・夕張市は、市民会館、美術館、図書館をつぶした。学校も減らした。子どもの人数が減る、財源が減るなど、何年、何十年か先のことが見えているので、だから今考えなければならない。

- ・学園で考えていくことが大前提でいくべき。

- ・公共施設や民間施設も含めて、高齢者施設、障害者施設などが増えてきている今、市としてどういうふうを考えていくか。体育館、図書館なども老朽化していく中で、どうしていくかを考えていかないといけない。

→・学園内の学校とそれに付随しそうな施設（図書館、文化施設など）でどうするかという方向性で検討していけばどうか。

②小学校と中学校のカリキュラム

- ・小学校と中学校を一緒にすると言うことは、今の社会情勢から大切なことである。

- ・一人では学べないことがあって、それは「自分とは違う考えがある」ということを学ぶことである。

- ・学校で学ぶということは、教育の中身を学びながら、同時に社会性を学んでいく。それを、固定化された人間関係の中でずっと上がっていくのはどうか。

- ・小規模校では、上下関係は何とか可能。同じ年代の中のフラットな人間関係の関わりはもっと必要であると感じる。

- ・孫が小規模校に通っているが、その母親に聞いても、大賛成である。孫の学校は、幼稚園から小学校まで一緒。新しい体育館ができたように、今までより良い物ができれば地域の理解も得られると思う。

- ・地域の方からは、地元から学校がなくなるのはさみしいという声を聞いた。ポジティブな考え方を持つことが必要。

- ・庄内学園で4.5kmのバス通学と聞いたが、現場の声が大切であり、特に小さいお子さんを持つ親の意見を聞くことが大事であると感じた。

- ・一体型の場合、小中一貫校を作ったのに、叶わなかった夢があっただけいけない。当初のお金はかかっても、地域、教員、子どもの夢を叶えることを考えたい。

- ・これからの子ども達に求められることについて、英語、ICT、アクティブラーニングなどを考えると、中学校の先生が小学校のところに入っていける仕組みを作っていく必要がある。

- ・小学校同士のカリキュラムがそろっていると、より効率的にできる。子どもの学びにとっても効果的である。

- ・次の一手として、学園の中で創意工夫しているので、市教委で吸い上げて、実践集を各学園に配り、更にもう一步進めるために何かできないか考えてもらう。

- ・学園長のリーダーシップのもと議論していただく。

- ・6年生のリーダーシップが必要であるということが、どこまでの意味をもっている

か知りたい。6年生のリーダーシップをとることなく、そのまま中学に進んでいくことがどうなのか。

→・6年生のリーダーシップの必要性などの課題もあげていくなかで、学園で議論していただく。

③学校間の接続

- ・地域振興、まちづくりという観点から、地域団体とつながり切れていない部分もある。地域Cが動いてくださっているので、学校と幼保園はうまくつながっている。
- ・両方にまたがっている幼保園については、両方の学園に出ていただくことで、当面は何とかなるのではないかなと思う。

・小さい年代は小人数が良いことは明らか。年齢にしたがって、大きくなるにつれて集団は大きくなるのが自然だけでも、現状のままの区分けの中で良くしていくことを考えた方がよい。

・9学園すべてで小中一貫教育を進めるということだが、一体型としてやっていくという方針は持っているのか。

→・小中連携教育を一步進めていきたい考えは持っている。全部一体校とは考えていない。地域や学校と一緒にになって相談しながら、一体型、分離型など適している形を考えていきたい。

→・両方ありうる考えでよい。一体校にする場合、校舎の築年数が違うため、段階を踏まないといけない。そうすると一貫カリキュラムが組めない。事情が学園ごと異なるため、一体型分離型どちらかを排除するのではなく、学園で両方検討し、どちらが適しているか考える。ただし、掛川市全体としての総数は、減らさないといけない。

④地域

・学校の課題は増えることはあっても減ることはない。学校へ投入する予算は少なくなる。

・地域と学校をつなぐを強くしなければならないことと、学校間を一体化していかなければならないことは、相反することである。

・地域は小学校との関係が深い。地域からすると何で学校を奪うんだということになる。しかし、一方で地域の力を何とかして学校に取り込みながら、学校を作っていかなければならない。この相反することを両方両立させなければならない。

・どういう手順でいけばいいのか、考えていく必要がある。

・これは、地域がやっていかなければならないという意識が高まればやっていける。

・学校評議員、地域学校協働本部、コミュニティスクールなどは、学園単位で大きなものを設置し、その中で学校ごとグループ化して活動するのは問題ないとして、そういう形にしていくという方向性はどうか。

→・掛川市は、すでにそういう組織（子ども育成支援協議会）があり、そういう動きをしている、組織上は問題ない。

→・学園化で、子ども育成支援協議会としてまとまっているので、すでにできている。

・子ども育成支援協議会の中に、複数のまち協が入っている。

・市から、全部のまち協にも話をしていきたい。

→・9学園の優先順位をつけて、いつ頃から議論するか決める。市長部局、市教委、外部委員、校長などを入れた会で、未来構想を練っていく。

→・報告書をいただいてからの話にもなるが、地域での協議も9学園一気にやるということは考えていない。指定研究のところで話をしていくこともあるが、指定研究と地域での協議は別として考えていきたい。

(3) 報告書の目次案について（事務局より）